

神の御手に守られている

牧師 山本 護

新型コロナという疫病が消滅したわけではないけれども、ひと頃のような切迫した心持ちではありません。コロナ感染のために一定期間、八ヶ岳教会は礼拝を二回に分けておこなっていた。凍てついた朝も、聖霊(寒風)のお守りをいただくため、窓を開け、薪ストーブをガンガン燃やし、換気を最優先に実行していた。礼拝堂内の二酸化炭素も測定し、どの程度の効果があるのか分らないまま何でも試み、教会でコロナが広がることはありませんでした。ふり返って感慨深いのは、コロナが猛威をふるっていたその最中にも、礼拝出席者は目立って減らなかったこと。こんな経験から、いかなる状況であっても礼拝を続ける大切さをしみじみ教えられました。

感染症を題材にした文学作品『ペスト(1947年)』はA.カミュのそれがよく知られていますが、それ以前D.デフォーの『ペスト(1722年)』は疫病と信仰を考える上で、とても重要な記録です。急激に広がるペストの感染を恐れて裕福なロンドン市民は郊外へ避難しますが、庶民は市中に留まらざるを得ない。そんな中、教会が閉鎖されるかと思いきや、礼拝はいつものように続けられていた。「彼らは熱心に教会にやって来るや、真剣そのものの表情で説教を聞いている姿は驚くほどだった」と本書は伝えています。

「主に申し上げよ。[わたしの避けどころ、砦。わたしの神、依り頼む方]と(詩編 91:2)」。

この詩編を胸にいだいて、デフォーはロンドン市内に留まった。詩編の続きにはこうあります。「夜、脅かすものをも、昼、飛んでくる矢をも、恐れることはない。暗黒の中を行く疫病も、真昼に襲う病魔も(91:5~6)」。ロンドンのペスト感染が終息したのは1666年。災禍の中を生きのびた人々の顔には「最悪というべき時期に自分を守り続けてくれた神の御手に対する、心からの感謝の念が満ち溢れていた」と報告されています。



窓をめいっぱい開けられる初夏、礼拝が終わると自生しているエゴの花が微笑みかけてくれた。17世紀のロンドン市民のように、私たちを守り続けて下さっている神の御手に心から感謝いたしました。Ω

※引用書籍『ペスト(中公文庫)』D.デフォー／平井正徳訳 ネットの古書でたったの19円也